

【実行委員後記】

『言語文化と日本語教育増刊特集号 2007 年版』が無事完成に至りました！これまでの苦労を思うと本当にうれしさとホッとした気持ちで一杯です。

実のところ、去年も投稿しましたが、論文の構成かつ内容について不十分なところがあまりにも多かつたため、不採用という結果となりました。かなりショックを受けましたが、「失敗は成功のもと」、めげずに再挑戦しました。今回、二の舞とならないように、前回査読者からいただいたコメントに従った上で、論文全体の章立て、論文スケルトン、論文草稿という順でゼミでの発表を重ね、論文構成と内容を全面的に練り直し、改稿しました。しかし、外部の査読者の「プロの目」では、やはり物足りないところが多々あったようです。査読者から多くの貴重なコメントをいただき、それに従って必死に答えるように書き直したのがこのレビュー論文です。執筆から活字になるまで 2 年以上の歳月を経てやっと完成しました。外部の査読は匿名という方式で行われましたので、個別にお礼を申し上げることはできませんが、この場を借りてお忙しい中丁寧に査読してくださった先生方にお礼を申し上げます。

また、今回レビュー論文の執筆者一人でもあり、編集事務局実行委員一人でもある私は、編集作業にもかかわりました。普段書籍の編集作業と無縁だった私が、一冊の本が出版されるまでの工程を知ることができて、大変勉強になりました。こうして多くの方の心血と労力を傾注して完成したレビュー論文集をできるだけ多くの方に読んでいただけることを願っております。

最後に、最終的に論文の書式を点検してくださった本誌編集委員のお一人である向山陽子さん、編集作業に不慣れな私のことを配慮し、編集作業を多めに担当してくださった張瑜珊さんに心より感謝を申し上げます。

(孫 愛維)

修士論文完成後、修論の結果に満足ができず、研究の方向性も失っていました。そのため、博士一年目は大学から遠ざかるわけでもなかつたが、自分の研究に対して目を向けもしなかつたです。「何のために日本にいるだろう」、「そのまま国へ帰つて就職した方がいいだろう」、「でも後悔しないかな」と心中でずっと葛藤を抱えていました。二年生の夏に入る前に、佐々木嘉則先生のゼミの SLA メーリングリストから、レビュー執筆の準備活動である「レビュー企画会」が夏休み中に開催されることを知りました。その外的要因(レビューの締め切り)が内的動機(自分の研究分野に向き合うこと)を促してくれることを期待して、企画書検討会の参加に申し込みました。

しかし、レビュー企画書検討会の後、論文の締め切りまで、かなりの時間の空きがあつて、怠け心が再び私を襲つてきました。もう逃げ道がないこと(レビューの正式の締切日)を知ったのは三年生になった 2007 年 5 月 25 日のことでした。その後、慌てて、足りない論文を集め、内容の理解に努力、レビューのスケルトンを練り始めました。幸い、自分の所属である岡崎眞先生ゼミのゼミメンバーに強力に支えられ、さらに佐々木泰子先生ゼミにもお世話になり、やつとレビューらしい論文を仕上げることができました。そして、査読者のお二人からのコメントにより改稿を重ね、やつと現在の形を皆様に見せることができました。もちろん改善するところはまだ多数ありますが、一本のレビュー論文を完成する達成感は大きいものでした。そのほかに、私にとって一番収穫になったのは、自分の研究をどの分野に位置づけることができるか、さらに今後はどの方向に研究を進めればいいか、を知りえたことでした。つまり、レビューは世の中にその研究分野を分かつてもらう以外に、レビューを書くこと自体が研究者の自分探しにも機能すると考えました。

「お茶の水女子大学言語文化学研究会」の会員かつ運営委員の一員として、今回のレビューをたくさんの人々に読んでいただけるように願い、次回の投稿を期待しております。

(張 瑜珊)

2007 年 11 月 15 日

編集事務局実行委員